

“舞踏？”ワークショップ「舞踏とは何か？」

向 雲太郎（舞踏家・振付家）

司会：河本英夫（東洋大学文学部教授）

河本 それではお話をはじめていきます。きれいな形の話になるのか、いろいろなところへ飛んでいくのかはよく分かりませんが、きれいに筋が通ってれば内容が豊かということでもないで、これはやってみないと分かりません。

まず、物理学あるいは普通の人間の感覚で言えば、私のこの体重で、このように立っているとき、なぜ立つということができているのかという場合、それは脚で踏ん張っているからです。しかし、同じ強さで床から押されているはずで、体重だけの力で床から押されていなければ、このように静止した状態で立つことはできません。しかし、床から押されているという感じを持つことはもうできません。そこにはいくつか理由がありますが、その一つは、自分の側から働き掛けているという、つまり、意識の向きが能動の側で働いているからです。もう一つは、自分の側から制御しているという意識です。このために、床から押されているという感覚は訓練しなければ思い起こすことができなくなっています。ところが、重力には引っ張られています。重力に引っ張られているために、下側に向いているわけです。また、大気圧はとても重いです。大気の圧力を感じることができるようになるといいのですが。ワークショップの最初に出てきたように、人が生まれて、^は這い始めるとき、同時に重さも出現しています。あの重さの出現の感覚のようなものが感じ取れば、これは相当できているということです。

また、圧に押されているとはどういうことでしょうか。例えば、最初に生まれてくるときには、海面下 2000 メートルほどの火山噴火口の所から生まれてくるので、非常に大きな圧力ももらっています。それがスーッと海水面まで上昇してくるときに、外で押さえてくれているものがなくなります。しかし、空気が押してくれています。このように、圧力、重さ、重力というものを感じ取る力がなくなってしまっています。これを回復するにはどうすればいいかというところから始めなければなりません。

特に、自分の重さを感じ取ることは難しく、「力を抜く」と言葉では簡単に言えますが、



最初は全く抜くことができません。力をうまく抜かなければ重さを感じ取ることができないという仕組みができてしまっているのです、今日はこの部分をさまざまな形で行っていただきました。今日のエクササイズは非常にすてきでした。

向 言葉で言えばよかったですね。今日は言いませんでしたが、重さを感じてくださいということもあります。重さを感じて動いてゴロゴロしてとか、重力を感じて転がっていくとか、少し言葉で言うだけでも違っていたと思います。結局、「ここ（腕）だけ吊られて」というのも、言い方を変えれば、こちらは全て重さを感じているということだと思いますので、そのようなことを言葉で言えば分かりやすかったかもしれません。

河本 動きをつくっていくときには、大きく分ければ二つの方法があります。一つは位置指定です。例えば、足の裏から膝のほうへ上げていき、それから骨盤のほうを通過させ、胃の辺りを通過させ、喉元を通過させ、頭のほうへと行きます。この場合は、位置を指定する働きを使っています。これは意識の最も重要な働きで、荒川修作がランディングサイトと呼んだものです。ランディングサイトとは位置を占めるということです。それは知るということではありません。位置を指定する働きは非常に重要な働きで、これなしでは移動することさえできません。



発達障害児で、歩けるのに止まってしまっていて、全く動かなくなる子がいますが、これは位置を指定することができなくなるからです。今日はこれをたくさん使っていただきました。つまり、位置を指定して、それを移動させることです。また、もう一つはイメージです。これは最初から最後まで非常にたくさんのイメージです。これ（腕を吊られる動作）などは、基本的には実際の糸で縛っているわけではありません。基本的にイメージの中で身体を動かしていくということです。

意識の働きからすれば、今日最も多用し、活用していただいたものが二つあります。つまり、それはランディングサイトという位置を占める働きとイメージであり、そのイメージの中で体が動かされていくというものです。

イメージに引っ張られるので、基本的には、このときにイメージによってという仕組みを使います。基本的にそれは、引っ張られ、その辺りに巻き込まれていくという仕組みです。今日はこれら二つが非常に多くありました。イメージとはフィクションではありません

ん。運動部の選手は皆そうですが、走りながら道路脇のショーウィンドーなどを見て、その日の自分の身体の感覚と走っている姿を確認しています。そのようなことをしながら、イメージをずっと使って体を動かしていくのです。

もう一つ聞いておかなければならなかったことがあります。今日の説明の中にはあまり出てきませんでしたが、それは、イメージを使って身体を動かしていくときに、動いている身体を感じ取るということです。イメージと感じ取るという部分には少しの落差があります。例えば、このように動いているときにこの辺りが引っ張られるというように、基本的には、いつも感じ取るという部分を伴っています。受動性を強く出すときには、イメージに巻き込まれて引っ張られているほうで行えばいいのですが、同時に自分の身体を感じるをつくるために、感じ取るという部分が必要です。この感じるという言葉はひどくやっかいな言葉です。外側に空気を感じるという言葉と、自分自身の身体を感じるという、全く違うモードを同じ言葉で表現したものです。動いている自分自身の身体を感じ取るということと、空気や圧力などを感じるということは、両方とも感じるという言葉でしか表現することができません。しかし、それは実際には行ってしまうのです。行ってしまうのですが、今日の向先生の方法は最初にこの受動性のほうを引っ張り出しています。受動性のほうを引っ張り出さなければ感じ方が細かくなりません。そのような受動性のほうから引っ張っていき、感じ取りを細かくしていくという方向で実施されたのではないかという感じを受けています。

身体の外自分自身のイメージ、あるいは何かに動かされているイメージ、そして感じるということです。ですから、身体を感じるというのは知覚ではありません。知覚で自分の身体を知ることとは別に、動いている身体をそれとして感じ取ります。この部分が今日のレッスンの中でも非常に重要な位置だったと思います。

向 身体の位置、ランディングサイトですか。例えば、玉が今どこにあるのかというようなことを言ったりもしますし、今日は2時間の駆け足で実施したので、軸については具体的にあまりやりませんが、身体の軸が今どこにあるのか、このように動いたときに軸がどこにあるのか、その軸を感じるということも一つのエクササイズとしてあります。

河本 身体の向きを変えて軸をずらすことにおいて、ずらすというのは、何かからのずれです。傾くということとは違います。傾きは地面に対して傾斜を与えるということですが、それだけではなく、何かからずれているという感じのことで、この何かとは重力です。重力というところから自分の体の軸をずらします。ここのずれを感じ取るということが非常に重要な方法です。重力に対して重さを感じているわけです。ずっと動かしていくときに、通

常、身体では感じなくなっているようなものをレッスンの中で一つ一つ気付いて、感じ取る形にしていきます。

内発的な身体を感じ取るということと、身体を知覚して知るということは全く別の働きです。気を付けなければなりません、メルロ＝ポンティは、知覚するという形で身体を捉えています。メルロ＝ポンティの中には、感じ取るという要素が非常に少ないです。それはフッサールの影響です。知覚というところで身体を捕まえるという形で行っており、フッサールやメルロ＝ポンティの仕組みからは、感じ取る身体というものがなかなか出てきませんでした。ところが、基本的に最も重要な感覚は、感じ取ることです。この由来は視覚ではなく、触覚です。触覚のほうから考えていかなければ、身体をうまく捕まえることはできません。フッサールという人は、視覚を中心にして現象学をつくり、これがずっと生きています。たしかに、視覚は決定的に重要です。目の位置だけで、自分の身体のバランスなどを全て制御しているからです。そして、視覚と触覚は、身体を支える場合の二大感覚です。動かすときには音の影響も大きいですが、基本的に大きな部分を占めるのは視覚であり、通常、普通の人間は身体を細かく制御する場合に視覚を活用し過ぎているというのが実情です。目を使い過ぎてしまっています。ですから、目でバランス制御などのさまざまなことをしています。また、移動するときにも目で位置を指定し、それに合わせて身体の動きをつくります。このようなことを常日頃から行い過ぎています。ところが、感じられるほうの身体、つまり触覚性身体を身体の制御に使おうとすると、なかなかうまくできなくなってしまうというのが実情です。

フッサールやメルロ＝ポンティではこの部分がごっそり抜け落ちてしまっています。特に西洋人は触覚ということあまり言いません。理由は分かりませんが、ほとんど言わないまま現代までできました。今日、体を動かして、横になったり、立ち上がったりましたが、そのときに、基本的には視覚的な目印を使う人がかなり多くいます。その部分で自分の側から感じ取るというところをもっと広くするためには、速度を遅くする必要があります。そのような仕組みがずっと入ってきていました。バランスが取れないまま、じっとゆっくり行きます。例えば、横になった状態から10分かけて起き上がろうとする場合、勢いを付けた動作ではそのような仕組みにはなり得ません。

今日は、いろいろな形でそのような身体感覚を呼び出すことを行っていました。向先生は、大駱駝艦の磨赤兒さんのところに行かれるわけですが、このような身体表現を行うきっかけはどのようなものだったのですか。

向 僕は絵画を描いていましたが、作業として、世界に対するいろいろな圧力や目に見えないものと戦うときに、平面上の絵画という表現だけでは世界にアプローチできないという限

界を感じていました。そのときに、麿さんという僕の師匠の舞台を見て、もっと自分という存在、体を使って世界にアプローチすることができると感じました。

絵画を描くということも、結局のところ、自分という体が描いているということもできますが、実際に展示されるのは、その結果としての絵でしかありません。舞台の場合は自分自身が出ていくことができるという、そして世界に実際的にアプローチできるのは非常に面白いと思いました。それがきっかけです。

河本 舞踏ではなくても、例えば、演劇集団の中でもその要素が出てきますね。

向 そうですね。

河本 演劇と舞踏では、やはり少し表現の仕方が違いますか。



向 麿さんはもともと役者なので、麿さんのつくる方法、描いている世界はいくらか演劇的です。ただ、麿さんはあまり言葉を使いません。そこは大きな違いだと思います。僕もお芝居の方向へ進む可能性もありましたが、言葉というものをそれほど信じていなかったので舞踏という方向に進んだのだと思います。

河本 麿赤兒という人はとんでもない人です。舞踏の最初に出てきた土方巽さんと、正月の三が日に、炭をガリッとかじって肴にし、冷酒をグビグビと飲んで、「なあ、麿」のような感じで2人が話しているのです（笑）。そのような場面が記録に残っていますね。

そのような人と関わる中で、ここが自分にとっての転機だったと思えるものがいくつかありましたか。この感じがかめてから何か少し違って来たというようなものですか。例えば、受動性の感じ方にもさまざまなものがありますが。

向 そうですね。どうでしょうか。やはり、疑うことが重要だと気付いたときは大きかったと思います。駱駝艦に僕の後輩が20人、30人といいますが、その中で疑うということに気付いている人は少ないかもしれません。言われたから踊っているという具合です。俺は入ってからかなり早い時期に、疑うということが舞踏の奥義の一部だということをつかみ取りました。今日は皆さんにそれをお教えしていました。疑うことが大事だと思いました。僕の好きな言葉に、「疑いなく受け入れることは裏切りである」というものがあります。です

から、やはり、どんなに大好きな人の教えでも「ちょっと待てよ」と疑うことが重要です。もちろん、その前に守破離じゃないですけど、完全に受け入れるという段階はあります。少し違うのではないかと思いつつも、まず完全に受け入れた後に徐々に疑いを持っていくということは非常に重要だと思います。

それに気付いたときは独立するしかありません。麿さんの言っていることに対して疑いを持った時点で独立するしかなかったと思いますが、そこが転機だったのかもかもしれません。結局、今は独立しています。

河本 例えば、身体表現で、映像に残っているものなどを見ると、表現としてはいわゆる舞踏であっても、やはり見られる身体の側でつくる人がいます。この身体なら傍から見ていてもきれいだというような身体表現があります。例えば、天児牛大さんは、見ていてもほれぼれするほどにきれいな動きやきれいな身体をつくります。天児さんのものを見るといつもすごいと思いますが、作品世界の中に、身体の持っているある種の訳の分からなさや野性味は一体どこへ行ってしまったのかという感覚が残ります。あのような部分、つまり身体の持っているある種の訳の分からなさや野性味のようなものについて、向先生はどう考えておられますか。

向 僕は野性味のほうが好きです。研ぎ澄まされて様式化された身体というよりも、野生というか、何か訳の分からないものほうに興味を持っています。そのようなエクササイズもあります。今、このように皆さんがお話ししている日常の行為ではない世界の行為のほうへ行き、そこでしばらくしてまた帰ってくるというようなことが俺の好きなエクササイズです。今日はそれをするかどうかで迷っていましたが、時間が足りず、できませんでした。

面白いですよ。とてもおとなしかった人が「うわー！」って急に叫びながら走り回ったりすることもあります。そういう解き放たれる瞬間、人間とは面白いと思える瞬間があります。そうではない、様式化し、美しく、かっこよく、面白いというものも分かります。それでも、自分がしたいのはそうではなく、どちらかといえば、人間の野生や狂気というものに手を突っ込み、それを引っ張り出してきて、舞台に置くというようなものです。

河本 そうしますと、そのときにも、表現である以上、何らかの技法があるはずで。つまり、技法を壊していくという、この壊し方の技法でもいいわけです。技法というところに、表現としてはどこかにそれがなければならぬと思います。例えば、表現としての狂気というのは、ただの気違いとは違います。ここがやはり訓練です。毎日でも、あるいは2日に1回でも、なぜ訓練をするのかという部分のどこかで引っ掛かっているはずで。

向　そうですね。昔、土方さんも有名な女優さんの分裂症のような妹さんと共演したことがあり、完全に土方さんが食われたそうです(笑)。鷹さんが「土方さん、何やってるんですか」と言うと、土方さんも「いや、向こうは本物だから」と言っていたらしいです。

しかし、俺にもそのような知り合いがありますが、一緒に舞台に立っていると、予想外のことを急にしゃべり始めます。「あれ、忘れちゃった。次、何やるんでしたっけ」と普通に尋ねてくるナチュラルさには憧れますし、好きでもあります。天性のものという感じです。

河本　今日のワークショップで、言葉としても何度も出てきたものがありました。つまり、体を動かし始めて、少し集中度を上げ、その状態で力を抜いて、その場の「1 回限り」という感覚が今日何度も話に出てきました。ただ、1 回限りという言葉の意味は分かりますが、身体を感じとしてはそう簡単にはつかめません。つまり、1 回限りの身体感覚とはどのような感じに近いのですか。

向　あれかもしれないです。非常に高い所からプールに飛び込むこと、あるいはジェットコースターに近いかもしれません。「あー、生きててよかった」ということをそのような仕組みを使わず、いつ倒れるかも分からないというつもりで歩くとか、そういう感じです。もちろんそれはどう自分を持っていくかに左右されます。足を一歩出したときに、親指からつかなければならないのに、もし中指からつくと世界が滅びてしまうという設定を自分でしてしまうことはありませんか。

河本　もう少し現場に近いところで言います。何日か続けて舞台をされるときに、体の疲れや集中度は毎日少しずつ違いますね。それでも、その日の調子で最も力が出るところで行っていきます。例えば、仕込みから5日間行うというときに、初日と2日目、また少し慣れてきた3日目では緊張感も違うので、その都度の集中のさせ方も少しずつずれてくると思います。そのような場合、何度も繰り返していることの中に、このようなコツがあるというようなことはありますか。

向　結局は、常に新鮮に生きていく、ということかもしれません。つまり、ちょっとした自分の気持ちの切り替えのようなもので、昨日も行っているのですが、初めて行っているのだと思込むように自分を持っていきます。実際に、昨日と違うことを必ず行っているということです。「なぞらない」ということはよくいわれます。昨日と同じことは行っていません。1ミリでも違っているということや、1秒違うなどという感覚です。そのように突き

詰めていけば、同じことはできません。そして気持ちのなかでも、故意にそのように持っていきます。そのようなことはあるかもしれません。

河本 では、フロアのほうから質問を。うまく当たっていれば、うまくお話を引き出せますが、外れているとそれができません。ですから大変です。ですから、あまりにも変な質問の場合は、もう少ししかみくだいて変形することになるとと思いますが、何か聞いておきたいことはありますか。

Aー 丹田などの言葉を使っていらっしゃいますが、舞踏に限らず、コンテンポラリーダンスなどでは、そのような言葉は使われることなのですか。

向 舞踏には雑食性な部分があるので、何でも取り入れます。既に亡くなられた大先輩で室伏鴻さんという人は、舞踏はハイブリッドだと言っていました。様々なことを取り入れます。例えば、空即是色、色即是空とか。内と外ということで、実際に皆はこちら（内）が実体だと言っていますが、こちら（外）側が実体だというエクササイズをよく行います。こちら（外）側が動くから体が動くという具合です。今日行ったことと同じではあるのですが、言葉の遊びというか。こちら（内）が色でこちら（外）が空ですが、こちら（外）が色でこちら（内）が空だというような、仏教的な話です。そのようなことを言葉として使い、思想としても取り入れています。また、土方さんという人はモダンバレエ、ダンスをしていましたし、特にそのようなメソッドを使っています。



今日は皮袋という言葉を使いましたが、実は、それは今、約80歳の鷹さんが20歳くらいの若いときのことで、野口体操というのがあって。野口さんの所へ勉強に行ったときに、野口さんが「人間の体なんて皮がこうあって、水なんだ、ゆらゆらー」などと言っており、それを聞いた鷹さんは、雷に打たれたように、「すげえ、こんな考え方があったのか」と言っていたそうです。それ以来、駱駝艦という僕のいた所ではそれをアプローチとしてずっと使っています。今日はそのような説明は飛ばして、舞踏ではとか、鷹さんはと言っていました。実は、それは野口三千三先生が言っていたことです。ですから、このようにいろいろな所から取り入れています。

A一 日本人同士であれば、丹田という言葉を使ったり、皮袋という言葉を使ったりして、体に対するイメージをある程度共有できると思いますが、舞踏をされる外国人に対して、丹田などの仏教由来の言葉を使って何かを伝え合ったりすることはできますか。

向 僕も海外などいろいろな場所でワークショップを開催し、そのようなことをしていますが、どうでしょうか。アメリカに留学していて、いつも通訳をしてくれる後輩がいるのですが、彼がアメリカからの留学生の送別会のときに、その人へ贈る言葉として、「本当に舞踏を学びたいなら、日本語を学んでください」と言っていました。結局、丹田もそうですが、いろいろな翻訳をして、彼のあらゆる知識、ボキャブラリーを総動員して伝えていたと思いますが、本当に伝わっているかどうかは謎ですね。

また、西洋の人の特徴として言えるのは、考え方が理屈っぽいということです。何もなくて動かされることができません。「ホワイ？ なぜ動くんですか、分かりません、理由をください」という感じです（笑）。理由として、動かされる、糸でつられるということを言いますが、自分が納得するまでなかなか動きません。それは大切なことではありますが、頭が固いと思ったりもします。

B一 先ほど、一瞬一瞬を大事にするという話があって、中指がついたら地球が減ってしまうというようなルールをつくってそれを大事にするという感覚だという話をされました。現実感覚として、一瞬一瞬を大事にする、なぜらないということをする、僕の場合は、それができなかったときの記憶ばかりが強く、後悔のようなものを感じる機会が多いです。そのような後悔ではなく、プラスの方向で、なぜっていないということによる喜びのようなものはどのようなときに浮かび上がってくるのでしょうか。

河本 もう少し、このような聞き方をしたほうがいいです。向先生が全力で行っても失敗することだってあります。例えば、ワークショップをしていても、車いすの小学生に対してどのようにするか分からない、うまくいかない、簡単には動かない、ということがあります。失敗するときに重要なのは、後悔のほうではなく、リセットの仕方です。恐らく、このリセットの仕方がないと、皆が皆同じように、教わったとおりにうまくいくとすれば、新興宗教の教祖になってしまいます。それではいけません。

つまり、本人のレッスンの中にうまくいかないこともありますし、さらに今日はここに20人ほどの人がいましたが、その20人の中にも、先生が前のほうで見ていてかなりの所

まで行ってしまった子、行きかけたけど墜落してしまった子、行きそうになったけどただ止まったという子など、いろいろな人が見えていたはずです。そのときのリセットの仕方です。例えば、うまくいかないときに、「あれ、これちょっとなんかな」というのは反省です。反省とは哲学的な病気です。この反省ということを引きかけとしては使いますが、そこから先には、経験のリセットの仕方にたくさんの仕組みがあります。今日は、何かうまくいかないというときのリセットの仕方についてお聞きしておいたほうがいいかもしれません。

向 恐らく、諦めたいなことが大事なのだと思います。受け入れるということです。できていないという言葉はあれですが、「あれ、なぞっちゃってる」という感じや悪いほうへ行っているということも受け入れてしまうということです。

河本先生が言っていたように、ワークショップなどではそのようなときもあります。「これ、どうしたらいいか全く分からない。背筋寒い、どうしたらいいんだ！」ということがあります。しかし、何とかなっていく。受け入れてしまうというのは諦めているということではありませんけど。そのときワークショップ生の誰かが「こうしたらいいんじゃないですか」と言って、やってくれたりして、「そうだよ」と言うこともあります。舞踏では全肯定と言ったりします。土方さんも結局は諦めています。高く跳べない、速く回れない場合に、「駄目だ、どうしたらいいんだ、もういいや、ゆっくり回ろう」という感じ。それは諦めの先にある思考なので、諦めなければ出てきません。「高く跳ぼう、高く跳ぼう、高く跳べない、高く跳びたい、高く跳びたい」と言っていると、恐らく低くしゃがむということは絶対に出てこないはず。ですから、そこで一度諦めてしまっているのです。

僕の師匠の鷹さんも、天賦典式・生まれてきたそのことが既に才能であり、何もしなくてもいいと言っていました。それは土方さんも「表現なんてしなくていいんだよ。それだけで、才能あるんだから」と言っています。恐らくあれも諦めです。鷹さん自身、「頭が大きくて、背が低く、何なんだ、俺の体は」と言っていました。全部受け入れて、「これでいいのだ！」と。

河本 その部分には恐らくレベルがたくさんあると思います。感情のリセットは難しいですか



ら、視点を切り替えるようにはできません。「まあいいか、何か起っちゃって、うまくいってないけど、まあいいか」という感覚は重要です。例えば、就職の面接で落ちてしまったときには、まあいいかという所からリセットすることが必要です。哲学科のなかにはそれができず、なぜ私が落とされなければならないのか、あいつは絶対に許さないというようなことを3日くらい考え、今度あの面接官に会ったら必ず復讐してやるというようなことをノートの書く人もいます(笑)。そのような人は、そのようなことを延々と考え、今度あのことを聞かれたらこう答えてやるというようなことを用意していくのです。そして、次の会場に行ったときには、用意したこととは何の関係もないことを聞かれ、なぜ私の用意したことを聞いてくれないのかということになったりします。

ですから、そのようなときに、まあいいかと思うことが必要です。基本的に、諦めの状態とは、自分自身の変数を増やしていくことです。あるところで、これは獲得しなければならない、これは絶対に何とかしなければならないということではなく、変数を増やすことで、そのうち何とかなるという感覚を持つ必要があります。ある意味で言えば弾力ですね。経験は弾力を持っているので、そこにうまく引っ掛かりができるようにします。

頭でゴリゴリ考えて、その考えた形から自分を制御すると、それでは力が入り過ぎていきます。ですから、エクササイズでは最初は力を抜くことから始まっていき、そうすることが必要です。力を抜く状態とは、おのずと変数が出現する状態でもあるからです。

これはうまくいかないと思えば、しばらく間を置いて待っていれば、別の変数が出てくるかもしれません。本人も気付いてなかったようなものが出現する可能性もあるのです。それにもかかわらず、何度も面接で落とされたときに、あいつは絶対に許さない、なぜ私をこのような目に遭わせるのかなどと考えると、相当つらくなってしまいます。

向 けれどもそれは才能かもしれません。河本先生の話聞いて思いましたが、そのようなねちねちしつこいみたいなものは哲学的には必要な素質でもあります。ニーチェもそうでしょうし。

河本 ここは少し突っ張って頑張ろうということは非常に大切ですが、力が入ってしまっている頑張り方は本人が最も大変です。頑張りをするものの、まあいいかという感じのゆるい頑張り方が重要です。

あそこにいる学生のM君は、これから自衛隊に行き、舞鶴で訓練を受けますが、そこで少し体を鍛えて、お金をかせいでから、また勉強すればよい、という程度感覚です。ですから、そのようなある意味のいい加減さ、あるいは変数の幅というものがどこかで必ず必要です。物を考えるときにはしっかり、一つ一つを正確に考えなければなりません。そ

のときに、考えるということと経験が動く幅を別の形で押さえていくことが非常に重要です。ですから、この部分が今日のレッスンに通じています。少し違う感じの経験の調整の仕方です。頭から自分の体を制御しようとする力が入ってしまいます。ですから、動くままの状態、それをどう調整していくかという違うやり方が出てくるということだと思います。

D- 今の話の中で、全肯定という言葉がありました。私もそれに似ており、取りあえずもらって、出して、残ればいいという感じです。駱駝艦の方たちは疑いを持っていないとおっしゃっていたと思います。向先生はその疑いを取りあえず肯定する、あるいは受け止めるというようにはならなかったのですか。何かを変だと思っても、取りあえず、変だけどいいかというようにはならなかったのですか。

河本 その部分は必ず通過するのです。

D- あったけれど、やはり変で、だからということですか。

河本 変というときに、その変という感じは、多くの人が訓練され、見て、あの人のようになりたいと思ひ、訓練し、その訓練するということに合わせて自分を枠の中に入れていることを示しています。ですから、枠の中での訓練をし、枠の中でこのようにしたい、となります。この枠の中ですということは、必ず1回通過しますが、そうしながらも、これは何かが違うという感じもできます。違うと感じるということは、自分の中に選択肢が出現しているということです。この選択肢が出現しているところをどのように自分自身の次の表現、次の展開の方向へ向けていくかという部分の問題です。

D- では、また別枠なのですか。

河本 何かを変だという感じは必ず経験します。教わったとおりに、それに合わせて行ってみたときに、そのとおりにできて満足し、それはそれで楽しいのです。しかしこれは変だと感じる部分があります。この部分が出てくるということは、本人の中に何か違う選択肢が生まれてきているということです。言われれば、それに合わせて行いますが、その中から違う方法もあると感じる部分です。

向 全肯定は全否定と背中合わせなんです。全肯定ができるということは、自分で全否定もしてしまっているということです。禅や乞食坊主は、手に入らないから全て捨ててしまうという考え方です。坂口安吾の無頼派なども、本当は全部手に入りたいのですが、全部手に入れることはできないので、全部捨ててしまうという、同じような禅的な考え方です。しかし、これはどっちもどっちで、どちらもないと成り立たないと思います。

疑うことをも受け入れるということ、言葉の遊びではないが、どっちがどっちなのか分からないという感じだと思います。

D- 何となく分かります。

向 いろいろあるのがこの世の中の世界です。曼荼羅のように。生も死も。二項対立だけではありませんが、いろいろなものが混じっているのがこの世界だからだということです。

河本 人生はいろいろです。男も女もいろいろです（笑）。

向 そのようなまとめ方ですか（笑）。

河本 できれば、来年も日本にいらっしゃるようなときを見計らい、また次の年に行ってみます。今年、1回目ですが、2回目になると全く感じが違います。今回のワークショップが思い起こせないかたちの記憶に残ってしまうからです。身体というものは、思い出したりしなくても、きちんと記憶に残っています。その状態で2回目をする、この感じだったのかということで、今年のこの回のことが思い出され、ようやく分かってきます。ですから、来年もう一度機会を設定してみたいと思います。

本日は本当にお忙しいところ来ていただき、ありがとうございました。